社会考慮と社会参加

一般的信頼、橋渡し型・結束型社会関係資本との関連から

○五十嵐 祐

(北海学園大学経営学部)

キーワード: 社会考慮、橋渡し型・結束型社会関係資本、一般的信頼

Social consideration and participation in society

Tasuku IGARASHI

(Faculty of Business Administration, Hokkai Gakuen University)

Key words: social consideration, bridging/ bonding social capital, generalized trust

社会の構造は不変ではなく、そこに暮らす人々の行動によっていかようにも変化しうる。現代の日本のように、民主主義に基づいて成立する社会の根幹は、選挙などによる個人の社会参加に基づいた社会システムの維持や変革にある。個人の社会参加を促進する要因としては、既存の社会制度に対する個人の満足、不満足といった感情的側面だけでなく、社会の枠組みを捉えようとする個人の分析的な側面、すなわち、社会考慮も重要となる。吉田ら (1999)は、社会考慮を、「個人の生活空間を『社会』として意識している程度や、複数の個人からなる社会について考えようとする態度」として定義している。社会考慮に基づく社会参加は、マクロな社会構造の維持や変革をもたらすような、マイクロな個人の自発的な協力的行動の発現可能性を担保する。しかしながら、社会考慮が現実の社会参加に及ぼす影響はこれまで十分に検討されてこなかった。本研究は、第一の目的として、社会参加の指標として投票行動を取り上げ、社会考慮との関連を検討する。

本研究の第二の目的は、社会考慮を高める要因を解明することである。吉田・元吉・北折 (2000)は、一般的信頼 (山岸, 1998) と社会考慮の間に弱い正の相関関係を報告している。個人内要因としての一般的信頼は、見知らぬ他者一般の協力的行動を期待する信念を指し、多様な人々で構成される社会全体の枠組みについて考慮する動機を高めていると推測される。その一方で、特に社会参加に関する態度形成については、個人を取り巻く身近な社会的ネットワークからの影響も大きい (Huckfeldt et al., 1995)。そこで本研究では、社会考慮の規定因を解明するため、個人内要因としての一般的信頼に加えて、対人的要因である社会関係資本の概念 (Punam, 2000) に注目し、異質な他者との開かれた社会的ネットワークへの接続を提供する橋渡し型社会関係資本、同質な他者との閉じた関係の中での情緒的なつながりを深める結束型社会関係資本のそれぞれが、社会考慮とどのように関連するかを検討する。

方法

調査対象 日本国籍で選挙権を持つ北海道の私立大学3年生174名 (男性141名、女性33名、平均20.9歳) に質問紙調査を行った。調査の実施時期は、第22回参議院議員通常選挙 (2010年7月10日) の約2週間後であった。

調査項目 (1) 社会考慮: 吉田ら (1999)の尺度を用いた (13項目、5件法; $\alpha = .902$)。 (2) 一般的信頼: 山岸 (1998) の尺度を用いた (5項目、7件法; $\alpha = .864$)。 (3) 橋渡し型・結束型社会関係資本尺度: The Internet Social Capital Scale (Williams, 2006) を参考に、行動レベルでの橋渡し型・結束型社会関係資本となりうる社会的ネットワークを個人がどの程度持っているかを測定する尺度を作成した。回答者はまず、自分の社会的ネットワークの中で、自分と価値観が似ている知り合い (家族を除く)、似ていない知り合いを、最大でそれぞれ4人まで思い浮かべた。次に、それぞれの知り合いについて、橋渡し型 (6項目; e.g., 「私は、この人と交流することで、新し

い知人と出会える」) および結束型 (6項目; e.g., 「この人は、私が困ったときに助けてくれる、信頼できる相手である」) の社会関係資本としての役割を果たしているかを個別に評定した (5件法)。分析には、橋渡し型・結束型の別に、すべての知り合いの評定値を平均化した指標を用いた。 (4) 投票行動: 第22回参議院選挙で投票を行ったかどうかを尋ねた。

結果と考察

社会考慮と投票行動 回答者全体の投票率は32.8%であり、20-24歳の全国平均投票率 (33.7%; 総務省, 2010) と有意な差は見られなかった。次に、投票行動 (棄権: 0、参加: 1) を従属変数、社会考慮を独立変数とするロジスティック回帰を行った。その結果、社会考慮が高い人ほど投票を行っていた ($B = 0.281$, $OR = 1.69$, 95%CI = [1.16-2.46], $p = .023$)。

社会考慮を高める要因 社会考慮と各変数の相関係数を算出したところ、一般的信頼 ($r = .186$)、橋渡し型社会関係資本 ($r = .403$)、結束型社会関係資本 ($r = .229$) のいずれについても、有意な正の相関関係がみられた ($ps < .05$)。一般的信頼と社会考慮の間に正の相関関係がみられたことは、吉田ら (1999)の結果と一致する。そこで、社会考慮の規定因として、個人内要因である一般的信頼と対人的要因である社会関係資本のいずれが強い影響力を持つのかを明らかにするために、社会考慮を従属変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 1)。予測変数として、第1ステップでは一般的信頼を投入し、第2ステップでは橋渡し型社会関係資本、結束型社会関係資本を投入した。その結果、第1ステップで有意であった一般的信頼の効果は、第2ステップで非有意となり、すべての変数を投入した場合、社会考慮を有意に規定するのは橋渡し型社会関係資本の効果のみであった。

以上の結果から、(1) 社会考慮は社会参加 (投票行動) を促進する、(2) 社会考慮は橋渡し型社会関係資本によって醸成される、ということが示された。従来、社会考慮の概念は主に社会的迷惑の抑制という側面から検討されてきたが、本研究の知見は社会考慮がポジティブな社会参加を生み出す可能性を示すものである。また、社会考慮に対しては、見知らぬ他者に対する個人の信念や、閉じた社会的ネットワークから得られる情緒的なサポートよりも、むしろ開かれた社会的ネットワークから得られる多様な視点が影響を与えていることが示唆された。

Table 1. 社会考慮に対する階層的重回帰分析の結果

	ステップ1 (個人内要因)	ステップ2 (対人的要因)
予測変数		
一般的信頼	.158*	.067
橋渡し型社会関係資本		.434**
結束型社会関係資本		-.100
R^2	.025*	.158**
R^2 -change		.134**

$n = 174$; ** $p < .01$, * $p < .05$.